

## 日立研究所創業 30 周年のお祝に寄せて

星 合 正 治

日研 30 周年 お目出とう存じます。

後進 中研は、2 年前に 20 周年を迎えましたが、日研はその前にしっかりした土台の出来ていた上での 30 周年であり、中研はここ 10 年来、ようやく近代研究所の体をととのえた 20 周年でありました。先進日研が確かな足取りで研究を推進され、数々の優れた成果を挙げつつ、ここに創業 30 周年の記念の日を迎えられたことに対して、謹んで心からなる祝意と敬意を表する次第であります。その上、本年は 大甕における新本館建設の業も第一期を完成、所員諸君が新たな気分で研究業務にのぞまれることとなったので、今後の発展はさらに期して俟つべし。

去る昭和 35 年、われわれの日立製作所は創業 50 周年のお祝を意義深く催しました。当時の倉田社長から、日立は今日、第二の創業に踏出すの時であり、今後は世界の日立を目標として進みたいとの力強い訓示がありました。

第二の創業とは何か。世界の日立とは如何なる意味と考えて然る可きか。

雑誌 FORTUNE はここ一兩年、アメリカを除いた売上 ranking で、日立は 15~16 位と報じています。アメリカを入れても、日立は 100 大会社の仲間に入り、電気関係だけでは 10 指の内に数えられる。われわれは単にこの数字を一層縮小すると云うことだけに 狙をつけて進めばそれでよいのでしょうか。

電気関係だけを数えるとしても、世界一流と目されるものに GE あり、WESTINGHOUSE あり、SIEMENS あり、BBC あり、PHILIPS あり、BELL あり、RCA あり、等々 錚々(そうそう)たるものが並んでいます。売上 ranking の上で、わが日立は必ずしも、これ等と天地格段の相違がある訳ではありません。寧ろそのある者に

対しては、当方が既に上位にさえあります。然るに、われわれ自身、これ等に対して何と云うことなしに、一目置いている感がある。それは、単に一種の先入観念と許り言い切れない。わたくしはその根元を技術水準の差——当方の技術に対する自信不足にあると云いたいのであります。

近年、日立は上記の海外諸会社からある程度技術を導入し、また、自らも工夫する処あって、われわれの技術水準は確かに向上して来ました。ただ残念なことは、今日現在の時間断面において、彼我の技術を冷静に比較してみますと、尚未だ、彼より教えられるものが我より提供し得るものに比べて、著しく多いことを認めざるを得ません。

戦後 海外との直接の接触が許されるや、当時の言葉で技術提携が我勝ちにと開始されました。現在ではそれが技術導入と云う寧ろ穏かな言葉に変わって来ましたが、それにしても現在これが為に海外に流出する対価は莫大な額に上っている所以であります。

一方向的技術導入に依る商売を端的に例えるならば、首から上の彼の所産に対して、首から下の我われの汗と脂とを交換する様なもの。かかる状態を以ってして、彼等と対等、1 対 1 の競合は出来るものでない。先方の頭腦的所産に対し、当方また頭腦所産を以って相対して、始めて、堂々それが可能である。前記海外一流の諸社相互には、事実そうした連繫の下に事業が遂行されている。そうした状態でなければ、1 対 1 の付き合いとは申せないのであります。

昭和 39 年 8 月 19 日の日刊工業紙上に、大屋 敦氏は次のように喝破されています； これからの時代に事業の

提携と云うことはあっても 技術の提携と云うことはあり得ない。技術はあくまでも交換と云う姿で育ててゆくべきだと云うことを、これからの技術者は肝に銘じてもらいたいものだ。

そうです。それでなければなりません。

現在 われわれは海外技術を導入する為に、敢て不当とは申しませんが、随分 不釣合な条件で先方と契約しています。今、直ちにこれを改めることは不可能でありましょう。今後と雖、容易なことではありますまい。幕末に海外と結んだ修交条約を対等の条件のものに改めるのに、明治になってからでも 30 年かかりました。日清戦役、そのほか、随分 深刻な試練を経た上でのことであります。われわれの技術契約を この修交条約と比べるのは、如何かとも思いますが、我において余程 確固たる技術を育成し、独自の技術を確立した上でなければ、実現は困難でありましょう。

50 余年前、小平翁は 日本人を深く愛し、日本人の力量を高く評価し、日本人の技術によって、日立創業のこ

とに第一歩を踏み出された。われわれの日立が世界の日立となる為には、この 50 余年前、小平翁を中心とした先輩の方々の、その精神 その心構えをここに新にして、第 2 の 50 年を迎えんとする、それが倉田社長の言わゆる第二の創業であり、世界の日立への途であると存じます。

そこで これを実現するため、基幹となる斬新秀逸な技術を生み出す方策はと云うと、日研、中研が頑張るほかありません。日研 中研における工夫 研究の成果が工場において具体化され製品化され、営業がこれに依って新たなマーケットを開拓して行く、それが正道であります。30 周年を迎えた日研、20 周年を送った中研が 協調協力して、この道を着実な足どりで競歩——強歩する外はない。

日研 30 周年のお祝の文を草しつつ、中研の立場と合わせて、お互に課せられた責任の重大さを、今更ながらに痛感した次第であります。

(39. 9. 22 記)

(日立製作所 中央研究所長)